

Title	地域文化とアート概念の拡張 : 神戸ビエンナー レ,10年の歩み
Author(s)	大森, 正夫
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65031
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 地域文化とアート概念の拡張 --- 神戸ビエンナーレ, 10年の歩み --大森正夫/京都嵯峨芸術大学

神戸市が阪神淡路大震災から10年を機に提唱した「神戸文化創生都市宣言」の具体的取り組みとして「港で出合う芸術祭 神戸ビエンナーレ」は開催された。この事業は、地域と時代のアイデンティティーを再認識・再評価することを基本指針とし、神戸の地域文化と日本の大衆文化力を基軸に、アートを地域概念の再評価から、地域をアート活動の再認識から創生することを目的としたのである。



事業は、新たなアート分野をコンペティションによって広く募集し、地域に由来する作家を多く招待するなど、これまでの美術分野には登場していなかっ作家が数多く参加する芸術祭にもなっていた。

そこで、2007年から2015までの10年5回の 事業をアーティスティックディレクターとし



て携わってきた立場から振り返り, 地域文化 との関わりとアート概念の拡張について再考 した結果を報告する。

## 神戸の文化力とアート

神戸は近代日本の歴史においても戦後の現代美術史においても日本をリードしてきた多くの芸術文化事業を実施してきた都市であり、一地方都市ではない自負に富む環境を有している。そこで、グローバル化した既成のアート概念の普及ではなく、都市の活力(神戸の文化力)でアート概念の創生をはかる芸術的事業として、神戸ビエンナーレを企画立案し、地域と時代のアイデンティティーを再認識・再評価することを基本指針とした。

換言すれば、神戸において生活になっている文化芸術活動を見直すことにより、地元の市民生活を活性化すると同時に閉塞化したアート概念が拡張できると考えたのである。特に、狭義のアートではなく、現時代における文化表現を総体的に扱い、分野的な広がりを意識できるような取り組みに力点をおいた。

芸術性豊かな神戸市民の文化力と先取・多様な「神戸」のブランド力を活用し、時事性に欠けるものや一部の専門家の嗜好を充足させるようなアートに偏る祭典ではなく、さま



ざまな価値が混在し独自に萌芽・育成されている未評価段階での芸術文化力を観覧・再評価できる場をつくることによって、神戸市域に留まらず各種の創造活動に誇りと弾みをつけることを目指した。

## 芸術祭のコンテンツカテゴリーと部門

具体的な事業の骨子となるコンテンツカテゴリーとしては「伝統芸術」「J-POP」「IT・MEDIA」「LIFE (ecology)」の4つの分野を設定し、このカテゴリーに基づいて事業を作成することとした。

また、事業の性格から、先進的かつ多様な芸術表現を求めるための日本文化的な「テーマ」に加え、「コンペティション部門」と地



元の芸術文化活動を紹介し振興する「神戸力発信部門」を設けた。そして、開催毎に諸条件を総合的に検討しながらそれぞれの事業内容や場所などを決定し、多くの分野での参加が可能になるように考慮した。

## 国際的な連携と事業の記録

地域性とジャパンコンテンツを重視しながらも、2014年に世界各国のビエンナーレ関係者の活動基盤として発足した「国際ビエンナーレ協会(IBA)」にも加盟し、入賞作家を光州ビエンナーレなどの国際的な芸術祭へも推挙するなど、海外組織との連携も行ってきた。

現代芸術祭の開催を目的に企画した事業ではなく、特異な背景から出発し独自のコンセプトを掲げて運営した芸術祭ゆえに、ガイドブックや記録集は全国書店で購入できる出版物として発行し、地域の特性を生かした時代の芸術活動として再考できるようにしている。

時事性と地域性を重視した神戸ビエンナーレは、独自なアート感覚と様々な分野のクリエーターが集い、人気や評価も世代や専門の差も含め、さまざまなアート感が錯綜・交流するイベント豊かな10年であった。

